
BAR「紫堇」第二話

杉岡 龍治 B4tBwTdtrQ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B A R「紫堇」第二話

【Nコード】

N 9 4 1 2 Y

【作者名】

杉岡 龍治 B 4 t B W T d t r Q

【あらすじ】

B A R「紫堇」通う主人公。

旧友でもあるマスターとの何気ない会話の時間。

俺はいまBAR「紫堇」入ったところだった。仕事で倒産した会社の社長一家を夜逃げさせるために遠出していたので、店に顔を出すのは三日ぶりだ。入り口の所にはそれまではなかった盛り塩がしてあり、山岡が青い顔で俯いていた。

「なんだ？客が入らなくて宗教でも始めたか？信者になると仲間が大量に店にでも来てくれるとでも思ったのか？」

そう言いながらも、店の中には俺の他に客はいないことに気が付いてはいた。

もちろん、それは入り口に立てば奥まで見通せる狭さの店だからなのだけど。

「出たんだよ、この店には出るんだよ」

山岡は震えた声でそう言った。

俺はそれが何を指して言っているのかと言うことを、長い付き合いの上で知っていたのだが、俺はあえて山岡に聞いたのだ。

「何が出た？ネズミでも出たか？」

「バカ野郎！！幽霊だよ！！幽霊が出たんだよ！！」

それはまだ俺たちが十代で無茶ばかりしていた頃。地元のチンピラと揉めて、血の抗争を繰り広げたことがあったのだが、そんな中でヤクザの事務所に山岡が拉致されると言うことがあった。それを聞いた俺はすぐに警察に通報して、駆けつけてみると、山岡は自力で事務所に詰めていたヤクザを叩きのめしてポン刀を片手に事務所から出てきたところだったと言うことがあった。そんな山岡が恐れるのがお母ちゃんと幽霊だった。最近はその嫁さんも加わったようだが、中でも幽霊が怖いらしい。霊感なんか無いのに。

一度、後輩が飲み場の席で自分が体験したという怪談話を始めた事があった。最初は山岡も、笑顔で柔らかくそんな話はバカバカしいから止めると言っていたのだが、それでも止めなかったなのでその

後輩の頭をビール瓶で殴るという行動に出たくらい幽霊が怖いらしい。

だから、この状態の山岡に冗談は通じないと言うことを俺は知っていた。俺は仕方ないので真面目に話を聞くことにしたのだ。

「おまえ、またクスリでもやってんのか？お母ちゃんにバレて袋叩きにあつて泣きながら、もうクスリにはでは出しませんって約束したんじゃないのか？」

「クスリなんてやつちやいねえよ！おまえ、ウチの母ちゃんがどれだけ怖いか知っているだろ？お母ちゃんに怒られるぐらいなら死んだ方がマシだ！！」

「じゃあ、疲れていたんだろ？店の経営が上手く行かなくて、金がないと言う事に心労が溜まつたんだろ？」

「金には困つて無いよ。嫁さんが株で稼いでいるからな。この店の収入があと100年無くても、生活できるくらいの金はあるんだよ」

「このヒモ野郎！！この店は道楽か！？」

「いや、嫁には早くこの店の経営状態を改善するように、ケツを叩かれているわけだが……良くならなければ解雇とか」

「シビアだな……まあ、どうでも良いけど。それで、何があつたんだ？」

俺がそう聞くと、山岡は思い出したかのように重い口を開き始めたのだった。

話によるとこうだった。この間、俺がこの店にいるときに6人の客が

入ってきた。この店は6席しか無いから、俺は店を出ることにして勘定を払って店を出た。すると、客達はそれぞれにカクテルの注文を始めたそうだった。実はこの客達は俺が雇つて来てもらったアルバイトだったのだけど、山岡はそれを知らないし、それはまた別の話なのだけど、この時に、7杯のカクテルが注文されたという。

「客が6人しかいないのに、注文されたカクテルは7杯だった。」

おかしいだろう?」

山岡は胸を張ってそう言った。

「いや、誰か2杯分を頼んだだけじゃないのか?」

「俺もそう思ったさ。一杯残ったカクテルを頼んだお客さんを聞いたが、お客さん達はその残ったカクテルを頼んでいないと言う」

「じゃあ、お前が聞き間違えたんじゃないのか?」

「おまえ、電気ブランの三ツ矢サイダー割なんて聞き間違えると思うか?」

「器用な耳だな」

「聞き間違えてねえよ!!それだけじゃねえ、その注文した人のいない片付けたカクテルが、いつの間にか無くなっていたんだよ」

「もう、病院行けよ」

「酷いな!!それだけじゃねえぞ?閉店した後に片づけをしているとパタパタと歩き回る足音が聞こえる」

「パタパタママだな。働き者だ。間違いない」

「わかんねえよ、そんな昔のポンキッキーズの歌なんか!!……:そう言えば、東京から帰ってきて、店を開くための物件を探しているときに、ここを紹介してくれたのはお前だったな?お前、何か知っているんじゃないのか?」

俺は何も知らないと言った。そして麒麟淡麗グリーンラベルを頼むと、350ミリリッターの缶とグラスが出てきた。

山岡はブツブツと、絶対にいる、この店には何かいると呟いていた。そんな山岡に、俺が事故物件に一月だけ住むというアルバイトをしたことがあるという事を教える理由はない。

それは無駄な血が流れるのを防ぐ努力でもある。

俺はグリーンラベルを自分でグラスに注ぎながら、後ろを通り過ぎたこの店の前のオーナーでもある妙子婆さんの幽霊へ、山岡に気がつかれないように目で注意した。妙子婆さんの幽霊は生きていたと同じ様な年齢を感じさせない笑顔で少し舌を出して笑うと、俺の隣の席に座り、かって自分がしていたように作業を黙々と続ける山

岡の後ろ姿を見つめていた。

妙子婆さんがこの店を切り盛りしていた頃は繁盛していたそうだが、常連客も多く、その多くに愛された人だった。景気の良かった時代でもあったからか、妙子婆さん一人では手が足りない時もあり、俺が手伝いに呼ばれることもあった。そんなある日、妙子婆さんは殺された。閉店後に押し入った強盗に刺し殺され店の売り上げを盗まれた。その犯人は警察には捕まっていなかった。そしてこれからも捕まることがないだろう。その理由を俺が誰かに語ることがない。ともかく、その後は妙子婆さんの息子が不動産屋に売り払い、俺が一月ほど住むことになったのだが、ちょうどその頃に山岡が帰ってきたという経緯があつて、俺が山岡にここを紹介したのだった。

その後、お祓いをした方が良くのかという相談を山岡から受けたりして時間は過ぎていった。

店のドアが開き、新たな客が6人入ってきたので俺は席を立ち、また来ると言つて店を出る。

山岡は席を立った俺に何か言いたそうな顔をしたが、ありがとうごさいましたと口をつぐんだ。お客達が山岡にオーダーを始める。

「俺はアイリッシュ・ミスト」

「私はドランビュイをストレートで」

「じゃあ、私は電気ブランを三ツ矢サイダー割でお願いします」

「私はセックス・オン・ザ・ビーチを」

「ホット・バタード・ラム・カウ を下さい」

「僕はムーンライト・クーラーを」

「ヘア・オブ・ザ・ドッグ下さい」

「私は舞乙女を下さい」

山岡が青い顔をした様子を見て、俺はニヤつきながら店のドアを閉める。今日の客は、俺が雇ったアルバイトではない。どうか山岡の腕が鈍っていません様にと、俺は神様仏様に祈つてやろうと思つた。店を出る瞬間、客の後ろに立つ妙子婆さんと目が合った。妙子婆さんは少し微笑むと、口元が大丈夫よと動いた。そしてその横

には、俺の知らない爺さんの幽霊が立っていたいたが、それは妙子
婆さんより10年早く亡くなった旦那さんだろうと思った。

(後書き)

B A R「紫堇」続編

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9412y/>

BAR「紫堇」第二話

2011年11月28日01時53分発行